高岡ライオンズクラブ第一五五七回例会・ゲストスピーチ資料

今さらながらの「令和」の精神

高岡市万葉歴史館 学芸課長　新谷 秀夫

令和三年五月二十一日（金）　於 高岡商工ビル

★新元号「令和」に込められた思い ―《君臣和楽》―

梅花の歌三十二首 并せて序

天平二年［730年］正月十三日に、帥老の宅に萃まりて、宴会を申べたり。時に、初春の令月にして、気淑く風和ぐ［于時初春令月、気淑風和］。梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす。加以、曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて蓋を傾け、夕の岫に霧結び、鳥は穀に封ぢられて林に迷ふ。庭に新蝶舞ひ、空に故雁帰る。

折しも、初春の佳い月で、気は良く風は穏やかである。梅は鏡の前の白粉のように白く咲き、蘭は匂い袋のように薫っている。そればかりではない、夜明け峰に雲がさしかかり、松はその雲の羅をまとって蓋をさしかけたように見え、夕方の山の頂には霧がかかって、鳥はその霧の穀に封じ込められて林の中に迷っている。庭には今年生まれた蝶が舞っており、空には去年の雁がかえって行く。

ここに、天を蓋にし地を坐にし、膝を促け觴を飛ばす。言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開く。淡然に自ら放し、快然に自ら足りぬ。

そこで、天を屋根にし地を席にし、互いに膝を近づけ酒杯をまわす。一堂の内では言うことばも忘れるほど楽しくなごやかであり、外の大気に向っては心をくつろがせる。さっぱりとして各自気楽に振る舞い、愉快になって各自満ち足りた思いでいる。

もし翰苑にあらずは、何を以てか情を攄べむ。請はくは落梅の篇を紀せ、古と今と夫れ何か異ならむ。園梅を賦して、聊かに短詠を成すべし。

もし文章によらないでは、どうしてこの心の中を述べ尽くすことができようか。諸君よ、落梅の詩歌を所望したいが、昔も今も風流を愛することには変わりがないのだ。ここに庭の梅を題として、まずは短歌を作りたまえ。

⑤ 815　正月立ち 春の来らば かくしこそ 梅を招きつつ 楽しき終へめ　大弐紀卿

正月になり春が来たならば、こうやって梅を迎えて歓を尽くしましょう。

822　わが園に 梅の花散る ひさかたの 天より雪の 流れ来るかも　主人

わが家の庭に梅の花が散る。（ひさかたの）天から雪が流れて来るのだろうか。

★「令和」のこころを受け継ぐ大伴家持 ―天平勝宝2年［750年］3月27日―

筑紫の大宰の時の春苑の梅の歌に追和する一首

⑲ 4174　春のうちの 楽しき終へは 梅の花 手折り招きつつ 遊ぶにあるべし

右の一首、二十七日に興に依りて作る。

春のなかでいちばんの楽しみは、梅の花を手折って客として迎えて、楽しく遊ぶことだ。